

キャサリン・マンズフィールド作

桃山まや訳

ドイツの保養所で

In a German Pension, by Katherine Mansfield, Translated by Maya Momoyama

今回訳出した『誕生の日』は、この短編集の中でもマンズフィールドの後期の作品に近いものだとわ
れています。主人公のアンドレアス・ビンツァーから、『前奏曲』や『入り江にて』に登場するスタンリー・
バーネルを連想させる方も多いのではないのでしょうか。

この作品では、主人公の内的独白によって登場人物を内側から描くという手法がとられていますが、そ
れは円熟期のマンズフィールドが得意とした手法の一つです。

本編のあと『疲れた子』『進歩的な婦人』『振り子』『恋の炎』と四篇続きます。『進歩的な婦人』は、保
養所を舞台にした一連の作品の一つですが、残りの三篇は一つ一つ独立したものになっています。『振り子』
『恋の炎』はマンズフィールドと同年代の女性が主人公になっています。『疲れた子』はチエーホフの『ね
むい』の剽窃ではないかと一時騒がれたことで有名な作品です。(桃山記)

第九話 誕生の日

アンドレアス・ビンツァーはゆっくりと目を覚ました。狭いベッドで寝返りをうち、
伸びをし 思いきり口をあけて あくびをした。口を閉じたときに歯がカチツと鳴
った。このカチツという音が何とも心地よかったので、アンドレアスは顎をかくかくさ
せながら何度も繰り返し鳴らした。なんて丈夫な歯なんだ！ アンドレアスは思った。
鐘のような音じゃないか。たいしたもんだ。抜けた歯もなければ詰め物をした歯もない
んだから。ちゃんと食べて、朝晩きちんと歯磨きをしてきたからこそだな。アンドレア
スは左ひじを立てて身体を半分起こし、右手をベッド脇の椅子の上に這わせた。たしか、
寝る前に鎖つきの懐中時計を置いたはずだが。けれど、そこに椅子はなかった。そう、
アンドレアスは忘れていたのだ。こんな予備の部屋に椅子など置いてあるはずがなかつ
た。忌々しい時計は枕の下にあった。

「八時半か、日曜日、朝食は九時だから 風呂に入る時間はあるな」 アンドレア
スの頭の中で時計が時を刻んでいた。彼はベッドから飛び降りて窓のそばへ行った。ヴ
エネチアン・ブラインドが壊れて、扇のような恰好で窓枠の下にぶら下がっていた……

「これは直さなくちゃいけないな。明日にでも、オフィスの若い者にちょっと寄ってもらおう。ああいう連中ならブラインドの扱いにも慣れてるだろう。二ペンスもやれば大工みたいに直してくれるさ……」アンナだって普通のからだだったからこれくらいお手の物だろうに。おれにははしご段を上る自信はないが……」アンドレアスは空を見上げた。空は輝いていた。不思議なくらい白く、一片の雲もなかった。下を見ると、家々の細長い前庭と裏庭が並んでいた。どの庭にも深い溝にそって柵が立てられていた。深い溝には橋が渡りあつた。このあたりの人間には、柵のこちら側から溝をめぐって空き缶を放り投げるといふ、とんでもない悪癖があつた。まったく、あいつらのやりそうなことだ。アンドレアスは空き缶を数えながら、憤りをこめて一つの決断をした。それはこのことを新聞社に投書するというものだった。もちろんアンドレアス・ピンツァーという署名入りで。

お手伝いの娘が彼のブーツを持って裏口から出てきた。片方を地面に落とし、残った方に手を入れると、頬をへこませながらじつと睨んだ。そしてふいに前かがみになると、ブーツのつま先めがけてつばを吐き、エプロンのポケットからブラシを取り出して磨き始めた。「なんて娘だ！ ブーツが伝染病にでもかかったらどうしてくれる。アンナはあの娘をたたき出すべきだ。たとえ、しばらくの間は一人で家事をこなすことになるうとも。起きて動けるようになったらすぐに。片方を放り投げ、もう片方につばを吹きかけなんて！ 誰のブーツだろうとお構いなしだ。一家の主に敬意を払うそぶりすらみせないんだから」アンドレアスは窓を離れ、洗面台のタオル掛けからバスタオルを引き抜いた。泣きたいような気分だった。「俺は男のくせに細かいことを気にしすぎるんだ。それが俺の弱点さ。生まれたときからそうだったし、きつと死ぬまでなおらないだろう」

静かにドアを叩く音がして、母親が入ってきた。母親は後ろ手にドアを閉めると、そのままドアに寄りかかった。キャップは傾き、長い髪がその肩を覆っている。アンドレアスは進み出て母親にキスをした。

「おはよう、母さん。アンナの具合はどう？」

老いた母親は、手を握ったり離したりしながら早口で言った。

「アンドレアス、服を着たらすぐにエルブ先生のところに行っておくれ」

「どうかしたの？」アンドレアスが言った。「よくないのかい？」

母親はうなずいた。アンドレアスは母親の顔色が変わったことに気がついた。網の目のように刻まれたしわが、皮膚の下から浮かび上がっているように見えた。

「ちよっとベッドに掛けたら」アンドレアスが言った。「一睡もしてないんだね」

「ええ、でも坐ってなんていられないの。すぐに戻らなくちゃ。アンナは一晚中苦しんでいたんだよ。疲れてるお前をどうしてもわずらわせたくないって言ってるね。あんたが風邪を引いたなんていうから、ずいぶん心配してたよ」

アンドレアスはたちまち自責の念に駆られた。

「無理やり言わされたんだよ。あんまりしつこく聞くからさ。母さんだって知っているじゃないか」

母親はふたたびうなずいた。

「そうだったね。だけどまだ心配しているみたいだよ。風邪はもうよくなっただろうとか、厚手の下着は大きな引出しの左側の隅に入れてあるとか言ってるもの」

アンドレアスは無意識に二度ばかり咳をした。

「そう」彼が言った。「アンナにぼくの喉はだいぶ楽になったって言ってよ。やっぱりそばには行かないほうがいいかな」

「それもそつだけど、アンドレアス、時間がないんだよ」

「五分で支度する」

二人は廊下に出た。母親が真向かいにある寝室のドアを開けると、中から絞りだすようなうめき声が聞こえた。

アンドレアスはその声に怖気づいた。バスルームに駆け込んで、二つある蛇口をいっぱいに回し、水がたまるまでの間に歯を磨いて爪を切った。

「なんてことだ、なんてことだ」アンドレアスは自分のつぶやく声を聞いていた。「いったいどうなっているんだ。初産でもあるまいし 三人目じゃないか。シエーファー老人だって、昨日、四人目はぼろつと生まれたって。アンナにはもつと腕のいい看護婦をつけてやるべきだったんだ。母さんはすぐにまるめこまれてアンナの言いなりだ。甘くていけない。それに何のつもりでおれがアンナに心配をかけたなんていうんだらう。よりによってこんな時に。まったくどうかしてるよ もう神経がどうにかなりそうだ」

キッチンにブーツを取りに行くとお手伝いの娘がコンロの前で朝食の支度をしている。「まさか息でも吹きかけているんじゃないだろうな」そんなことを考えながら、アンドレアスはお手伝いの娘にひどくそっけない態度をとった。彼女の方は気づいていなかった。彼女は二階で進行している事態の重大さにおびえながらも、震えが来るほどの喜びで頭がいっぱいだったのだ。一つ息をするごとに、命の神祕が解き明かされていくような気さえしていた。その朝、食卓の支度をしながら、最初の皿を置いたときに「男の子」、次の皿を置いたときに「女の子」と交互に言ってみると、最後に置いた塩用の匙が「男の子」で終わった。「すぐ旦那様にお知らせしよう。きつと安心なさるわ」娘はそう決めていた。けれども、主人はそれを言い出す機会を与えてはくれなかった。

「カップとソーサーをもう一つ用意しておいてくれないか」アンドレアスが言った。「エルプ先生がコーヒーを飲むかもしれないから」

「エルプ先生、ですか？」娘の持っていたスプーンがフライパンからはみだして、コンロの上に油を二滴たらした。「それじゃあ、なにかお作りしておきましょうか？」けれど、ドアがぱたんとたたきり主人の姿はどこにもなかった。アンドレアスは通りに出ていた 人影はなかった このあたりは日曜日の朝になると死んだように静かだ

った。橋を渡っていると、フェンネルの強い香りと溝の中から立ち昇る腐ったごみの臭いが鼻をついた。アンドレアスは投書のことを思い出していた。角を曲がって大通りに出たが、店はどこもシャッターを下ろしていた。新聞の切れ端や干し草や果物の皮が舗道に散らばっている。下水溝には土曜の夜の残骸が詰まり、通りの真ん中では犬が二匹、じゃれあいながらだらしなく寝そべっていた。角にあるパブだけが店を開けていて、若いバーテンが入り口の踏み段に水をまいていた。

アンドレアスは唇をゆがめ、難しい顔をしながら水たまりを避けるように慎重に歩いた。「今朝はなんでこついろいろな事が気になるんだ。日曜日のせいかもしれない。せつかくの休みだっというのにアンナはベッドの上で身動きが取れないし、子供たちはよそへやられちまっているんだから。どんな男にだって、日曜日には家族と過ごす権利がある。それにしても、どこもかしこもなんでこつ汚いんだ。通りを掃除しておかないと、疫病が蔓延してこの町はそのうち機能不全に陥ってしまうぞ。役所に口が利けるといいんだが」アンドレアスは肩に力をこめた。「だが、今は医者かさぎだ」

「ただいま先生はお食事をしておいでです」メイドが出てきて彼にそう言った。案内されたのは薄暗くかび臭い待合室だった。窓のそばにガラスケースが置いてあり、その下にしだの鉢植えが入れてあった。「申し訳ありませんが、しばらくお待ちいただくようにとのことです。新聞でもお読みになってくださいませんか」

「なんて辛気臭い部屋なんだ」アンドレアスはそう思いながら、窓辺に近づき、ガラスケースをこつこつたたいた。「朝食中だっつて？ こんなことならすきつ腹で飛び出してくるんじゃないかった」

牛乳を積んだ荷車がガタゴト音をたてながら通り過ぎていった。御者が荷車の上に乗って鞭を鳴らしていた。上着の襟にゼラニウムの大輪を挿し、揺られながらも、上体をそらすようにして、荷車の上にしつかりと立っていた。アンドレアスは窓から首を出し、通りを下っていく荷車を眺めた。見えなくなっただけからミルルク缶のぶつかり合う音をいつまでも聞いていた。

「うーん、ああいうのも悪くない」彼はそう思った。「ああいう暮らしも捨てたもんじやないぞ。朝は早い、十一時までには仕事が終わる、乳絞りの時間まではもう何もすることはないんだから」言いつぎだとはわかっていて。けれども、アンドレアスはそう考えることで自分を憐れんでみたかったのだ。

メイドがドアを開け、エルブ医師を中に通した。アンドレアスは振り向き、エルブ医師と握手した。

「やあ、これはビンツァーさん」エルブ医師は真珠色のチョッキについたパンくずを払いながら陽気な声で言った。「いよいよ後継ぎのお生まれですか？」

アンドレアスは内心おどりがあがった。跡取り息子とはよく言ってくれた！ アンドレアスはまた男と話ができることがうれしかった。しかも、四六時中こつしたにかかわっているまともな男だ。

「まあ、そんなところですよ、先生」アンドレアスはそう答えると、笑いながら帽子をつかんだ。「朝早くにむりやり起こされましたね、なんでもいいからすぐに先生をお連れするようにと母にいわれたものですか」

「すぐに馬車を用意させましょう。」一緒にいかがです。「こつ蒸し暑くてはたまりませんな。あなたも顔が赤カブのように真っ赤ですよ」

アンドレアスは笑うふりをした。医者はいれだから嫌なんだ　医者というだけで何を言ってもいいと思っている。「こいつもこ多分にもれず相当つぬばれが強いと見える」アンドレアスはそう決めつけた。

「奥さんは一晩じゅうどんな様子でしたか」エルブ医師が言った。「おや、馬車がきたよつだ。お話は道々うかがうとしましょう。できるだけまんなかに坐つてくださうよ、ビンツァーさん。はじに寄られると、あなたの重みで馬車が傾いてしまいますからな

あなたのように成功した実業家にも困ったものだ」

「俺より十キロ以上重いくせによく言つよ」アンドレアスは思った。「腕は確かなのかもしれないが　まったく胸糞の悪いやつだ」

「さあ出発だ」エルブ医師が小さな茶色い馬に鞭をあてた。「奥さんは眠れたようですか？」

「いいえ、眠れなかったようですよ」アンドレアスはそつげなく答えた。「実を言つと、ちゃんとした看護婦をつけておけばよかつたと後悔しているんですよ」

「おや、あなたのお母さんだったら、看護婦が「ダースかかつたつてかなわな」と思いますけどね」エルブ医師は満足そうに言った。「実のところ、わたしは看護婦をあまり買つてないんですよ　荒つぽくていけない。赤ん坊の取り合いをするんですよ。まるでパトロクロスの亡骸を奪い合つてでもいるように……　そついえばその場面をイギリス人画家が描いてますけど、ご覧になったことがありますか？　レイトンだったかな？　それは見事な絵でしたね　活力が漲っているというか」

「またこれだ」アンドレアスは心の中でつぶやいた。「自分の知識をひけらかしてこの俺を馬鹿にしている」

「ところで、あなたのお母さんですが　しつかりしてらっしゃるし　有能な方じゃありませんか。頼られると親身になって世話をやいておいでだし。それに引き換えこのあたりの商店ときたら　化膿した腫れものですね。役所はよく平気でいられるもんだ」

「それほどひどいとは思いませんけど　なかなかどつして立派なもんじゃありませんか　ちよつとばかりペンキがはげてはいますけどね」

エルブ医師は口笛を吹いて馬に鞭をあてた。

「さて、坊やがあまりママを苦しめないでくれるといいんだが」エルブ医師が言った。

「さあ着きました」

後ろの席で揺られていた痩せこけたお供の少年が、馬車から飛び降りて馬の口をとつ

た。アンドレアスはまっすぐに居間へ行き、エルプ医師はお手伝いに案内されて二階へ上がって行った。アンドレアスは腰を下ろし、カップにコーヒーを注ぎ、魚料理を取り分けるよりも先にまずロールパンを半分ばかりかじった。そうしてようやく魚をのせる温かい皿がないことに気がついた。すべてがいつも通りにはいかなかった。アンドレアスは呼び鈴を鳴らした。すると、お手伝いがスープと温かい皿を乗せた盆を持ってやってきた。

「ストーブの上に載せておいたんです」娘は照れくさそうに笑った。

「ありがとつ、気がきくね」アンドレアスはスープをすすりながら、娘の愚かさにごこかほつとしていた。

「エルプ先生がいらしたんでほつとしました」娘が自分から話した。

「うん、うん」アンドレアスはそう答えた。

娘は目をきよるきよるさせながら次の言葉を待っていたが、やがてこの世の男どもを思い切り憎みながら台所へ戻っていった。子どもなんか絶対に産むもんかと誓いながら。アンドレアスはスープも魚もきれいに食べきった。食べているあいだに部屋の中が少しづつ暗くなっていた。風がかすかに吹いてきて、梢が窓ガラスをたたいた。ダイニングルームの窓からは港の防波堤と大きくうねる波が見えた。風が物悲しい唸り声をあげ、家をかからめとるように通り過ぎて行った。

「嵐がやってくるぞ。この分だと一日じゅう外には出られそうもないな。まあ、嵐にだつてひとつくらいはいいことがあるさ。空気がきれいになるんだから」

お手伝いの娘が、あわてたようにパタパタと家じゅうの窓を閉める音がした。するともう庭に下りてきて、芝生の上に渡した物干しロープからティータオルを外している。彼女は働き者だった。間違いなくよく働いた。アンドレアスは本を手に取り、肘掛椅子を窓のそばまで引いていった。けれども無駄だった。本を読むにはあまりにも暗かった。アンドレアスは目を凝らしてまで本を読みたいとは思わなかったし、朝の十時に灯りをつけるつもりもなかった。アンドレアスは椅子の中へたり込み、クッションのきいた肘掛けの上に肘をのせて、ぼんやりと物思いにふけていた。「男の子？ そうだ、今度は必ず男の子だ」「お子さんは何人ですか、ビンツァーさん」「女の子が二人に男の子が一人です！」「理想的な数だ。もちろん、ビンツァーはえこ鼻肩をするような男ではなかった。けれど父親にとって息子はどうしても必要だ。「息子のために会社を大きくしてやるぞ！ ビンツァー父子商会！ この先十年は生活を切りつめなくちゃならないな、できるだけ支出を抑えて、そして」

すさまじい風が通り過ぎて行った。家をつかみ、揺らし、一瞬手を緩めたかと思うと、それはもう一度つかみなおすための準備にすぎなかった。波が大きくうねり、防波堤に打ち付けては白く砕けていった。上空は白く灰色の雲が切れ切れに飛んでいた。

エルプ医師が階段を下りてくる音が聞こえた。アンドレアスは言いようのない安堵をおぼえた。彼は立ち上がり、灯りをつけた。

「タバコを吸つても構いませんか？」エルブ医師はアンドレアスの答えも待たずに煙草に火をつけた。「タバコは吸わないんですか？ 身体を害してまでつまらない習慣にふける時間はないということですかね」

「家内はいまどんな様子ですか？」アンドレアスはこの男にうんざりしながら訊ねた。「ええ、順調にいつてますよ。奥さんからあなたの様子を見てきてほしいと頼まれましてね。あなたが心配しているだろうから」とエルブ医師は笑いながら食事の終わったテーブルに目をやった「少しは召し上がったようですね」

「ヒュー、ヒュー」風が唸りながら窓枠を揺らした。

「おやおや、なんて空模様だ」エルブ医師が言った。

「ええ、アンナの神経に触らなければいいが。今あれに必要なのは気力だけですからね」「えっ、今何ておっしゃいました？」エルブ医師が言った。「気力ですって？ これは驚きましたね！ あなたと私の気力を合わせたって奥さんにはかなわないでしょう」。気力のことなら心配はいりませんよ。奥さんは気力そのものですから。ほこりにまみれて家事をこなし、四年間に三人のお子さんを産もうっていう人ですよ」

エルブ医師は吸いかけのタバコを暖炉の中に放り込み、渋い顔で窓の外を眺めた。

「この男は俺を責めているんだ」アンドレアスは思った。「これで二度目だ 最初は母さんのことで、そして今度は人の弱点を突いてきた」ものをいう気にもなれなかったので、アンドレアスは呼び鈴を鳴らしてお手伝いを呼んだ。

「テーブルの上をすぐに片付けてくれないか」彼は命じた。「夕食の時間までこのままにしておくわけにはいかないんだ！」

「そんなにきつく当たらんでも」エルブ医師がとりなすように言った。「この娘だって今日はいつもの倍も仕事があるんですから」

その言葉にアンドレアスは切れた。

「お言葉を返すようですが、わたしと召使たちの問題に口をはさまないでもらえませんか！」「この時アンドレアスは、「召使」と言わなかったことに何かばつの悪いものを感じた。

一方エルブ医師のほうは平然としたもので、頭を振り、両手をポケットに突っ込んだまま、つま先とかかたでバランスを取るように体を前後に揺らしていた。

「天気の良い日です」エルブ医師は皮肉交じりに言った。「お察しします。嵐になるなんて ほんとに運が悪い。出産は天候に左右されますからね。晴天は女性に活力を与え 出産を促します。洗濯と出産は天候の良い日に、なんてのはどうです。悪くないでしょ この文句 わたしのようなおいばれ医者にしては」アンドレアスは何も答えなかった。

「さて、そろそろ患者さんのところに戻るとするか。あなたは散歩にでも行かれたらどうです。頭がすっきりしますよ。今のあなたには最良の処方箋だと思いますけどね」

「いや」アンドレアスは答えた。「やめておきます。こんな空模様ですから」

アンドレアスは窓辺に置いた椅子に再び腰をおろした。そして、お手伝いの娘がテーブルの上をかたずけるかたわらで本を読むふりをしていたのだが……いつのまにか物思いにふけていた。物思いにふけるなんて、ずいぶん久しぶりのことのような気がした。忙しくて息をつく暇もなかったからだ。一日中仕事に追われ、夜になってもほかの男たちのように仕事をおぼれることができなかった。それに、アンナは生まれてくる子供のことで頭がいっぱいだったし、これまで二人は赤ん坊のことしか話してこなかった。男の子が生まれてもアンナなら立派にやっっていくだろう。彼女はなにもかもよく心得ていた。

強風のなかを教会の鐘が鳴り始めた。ひどく遠くに聞こえたかと思つと、今度は、町中の教会が前の通りに押し寄せてきたかのように近くで聞こえた。どちらの音も、アンドレアスの心になんともいえないぼんやりとしたやさしい感情を目覚めさせた。そういえば、このくらいの時間になると、アンナはホールからよく声をかけてきたものだ。「アンドレアス、早くいらっしやいよ。コートにブラシをかけてあげるわ。わたしの支度はもうすんでるのよ」そして二人は家を出る。アンナはアンドレアスの腕につかまり、彼の顔を見上げていた。そう、アンナはひどく小柄だった。アンドレアスは、二人が婚約したときに言った言葉を今でもよく覚えている。「ちよつど僕の胸のところだ」するとアンナはスツールに飛び乗り、アンドレアスの頭を下に引つ張つて笑った。あのころはまったく子供のようだった。彼女の子供たちよりも幼く、ずっと元気ではずらつとしていた。仕事から帰ると通りまで駈け出してきたあの姿！ 新居を探している時の笑顔。ああ、あの笑顔ときたら！ 思い出にふけりながらにやにやしていたアンドレアスの顔が、にわかに真顔に戻った。確かに、結婚は男よりも女を変えるものだ。それにしては何という落ち着きぶりだろう。結婚して二カ月もたたないうちにアンナはすべてを失ってしまった！ とにかく、赤ん坊さえ生まれてしまえばじきに元気になるだろう。アンドレアスはアンナと行くささやかな旅行の計画を立て始めた。アンナを家から連れ出してどこかでのんびりしてくるつもりだった。なんと言つても、二人はまだ十分に若い。なのにアンナは退屈な日常にどっぷりとつかつてしまつていた。アンドレアスは、何としてもアンナをそこから引つ張り出してやらなければならないと思つた。

アンドレアスは立ち上がり、客間へ行き、音をたてないようにドアを開けると、ピアノの上に立ててあったアンナの写真を手に取った。アンナは、あのしたにふわふわした大きなリボンのついた白いドレスを着て、造花のポピーと麦の束を抱えて立っていた。いくらか緊張しているように見えた。ひ弱な感じさえした。豊かな髪がそんな印象を与えていた。髪の重みでうつむいているように見えたがその顔は笑っていた。アンドレアスははつと息をのんだ。写真の娘は、彼の妻なのだ。これがたった四年前に撮つたものだなんて。アンドレアスは写真を引き寄せると、屈んでキスをした。そして手の甲でガラスをこすつた。するとその時、今朝がた廊下で聞いたよりももっと恐ろしい声が聞こえてきた。その声は風に巻き上げられ、こだまするように屋根の上まであがる。

通りに落ちてとこかへ飛んで行った。アンドレアスは腕をだらりとさせた。「一体どうしたらいいんだ」彼はそうつぶやいた。そして写真に向かつて言った。「それほど恐ろしいことが起こるはずがない。たぶん俺は心配しすぎているんだ」薄明かりの中で、アンナの笑顔はかげりをまし、どこか謎めいて冷酷にさえ見えてきた。「ちがう」アンドレアスは思った。「この顔はアンナの最高に幸せな時の顔じゃない　こんな笑顔を撮るんじゃないかった。ちっとも俺の妻らしくない　俺の息子の母親にも見えない」確かにその通りだった。写真の娘は、将来、会社経営のパートナーとなる彼の息子の母親には見えなかった。アンドレアスは写真を見ているだけでイライラしてきた。写真をいろいろな光の下にもっていき、脇から眺めたり、遠くから眺めたりしてみた。けれどイライラは募るばかりだった。アンドレアスは写真を三度暖炉のところへ持って行き、ようやく火格子の中にある日本製の傘の向こうに放り投げる決心をした。けれど、高価な額縁を無駄にするのもばかばかしい、と思いついた。それに写真を焼いたところでどうなるものでもなかった。写真のアンナは見知らぬ人のようだった　異様で　死ぬ前か死んだ直後に撮られたものようだった。

その時、アンドレアスは風がやんでいることに気がついた。家の中がしんとしていた。こわいくらいしんとしていた。クモが背骨を這い上り、顔を横切っていくような嫌な気分を味わっていた。青ざめた顔で客間の真ん中に立っていると、エルブ医師が階段を下りてくる音が聞こえた。

エルブ医師が客間に入ってくるのが見えた。部屋が大きなガラスボールになってくるくる回っているような気がした。エルブ医師が真珠色のチョッキを着た金魚になって、泳いでいるように見えた。

「愛する妻は死んだんだ！」アンドレアスはエルブ医師が口を切る前にそう叫びそうになった。

「今回は男の子でしたよ」エルブ医師が言った。アンドレアスはよろけながら前へ出た。「危ない、しっかりなさい」「エルブ医師はそう言いながらアンドレアスの腕をつかんだ。「バターのようによくにやぐにやぐだ」

アンドレアスは喜びに包まれていた。嬉しくてたまらなかった。

「ああ、神様！　この俺が苦しみを知らないなんてもう誰にも言わせないぞ」